日本行動計量学会
計量学会会報
第40号
1986年10月8日
日本行動計量学会
運営委員会広報係
（〒106）東京都港区
南麻布4－6－7
統計数理研究所内

モデル診断と計算機統計学

田中　豊

モデル・ビルディングのプロセスは、①モデルの同定、②パラメータの推定、③モデルの診断、④モデルの応用、のような四つのステップからなると言われている。③から①へのフィードバック・ルートがあり、モデルやデータに不都合な点があれば、修正して再度新しいモデルがあてはめられる。

このようなプロセスの中では、モデルの診断が要の位置を占めるが、その内容としては、ⓐデータへの適合性の評価、ⓑ分析結果の安定性の評価、ⓒ固有技術の側面からの妥当性の評価などが含まれる。ⓐとⓑは統計学の問題、ⓒは主として固有技術の問題である。最近ⓐとⓑに関する統計的方法の研究が目につく。とくに数学的構造の簡単な回帰分析での研究が多く、Belsley, Kuh and Welsch(1980)やCook and Weisberg(1982)などの成書が出版されて以来、実際の応用の場にも急速に普及してきたようである。

ⓐのデータへの適合性の評価には、モデルの仮定の吟味や外れ値の検出が含まれる。残差を予測値や独立変数に対して散布図に描く残差プロットはDraper and Smith(1966)でおなじみの古典的な方法であるが、最近ではより精密に検討するための偏回帰プロットや、コンピュータを活用してシミュレーションによる信頼幅つきのQ－Qプロットなど新しいグラフィカルな方法が開発されている。また別のアプローチとして、仮定の一部をゆるめたモデルとのあてはまりの良さを比較して検定する方法もいくつか提案されている。

ⓑの分析結果の安定性・信頼性の評価とは、データが少し変化したときに分析結果がどの程度安定しているか、という問題であるが、観測値を一つずつ順に除いてみて、パラメータの推定値や予測値がどのように変化するか、を検討する方法が代表的である。二つ以上の観測値の影響を問題にするなら、複数個の観測値を同時に除くことになるが、この場合はその複数個をどう選ぶかが問題になる。

さて、これまで述べてきたようなモデルの診断は回帰分析に特有の問題ではない。例えば因子分析にもそのような問題はあり得るしまた推測統計的意味でのモデルを持たない主成分分析においても同様の問題はあり得る。この観点から、筆者らはⓑの問題に焦点をしぼって、数量化法などの多変量解析諸法における分析結果の安定性や信頼性について調べてきた。

そこで工夫を要した点の一つは如何にして計算の負荷を減らして実用的に解を求めるか、ということである。回帰分析の場合には、一つの観測値を除いたときの統計量の値は、除かないときの値に簡単な修正項をつけることにより計算できる。したがって、影響の大きい観測値を探すために、回帰分析の計算を何回もやりなおす必要はない。しかし例えば、因子分析や主成分分析、数量化Ⅱ～Ⅳ類などについては、残念ながら、そのような便利な式はみつかっていない。そこで、精度を犠牲にして、テイラー展開や摂動展開による近似式を用いることになる。いちいち精密計算をして反復解法や固有値計算を何度もやりなおせばよいという考え方をする人もいるが、それでは実用にならない。

行動計量学は現象と理論との接点を重視する。現象分析においてその点がもっとも重要なことは言うまでもないが、図的表現を含めたコンピュータの活用も不可欠であり、計算的側面も無視できない。計算機統計学の発展が望まれる所以である。

（日本行動計量学会理事
岡山大学教養部教授）
たなか・ゆたか

第十四回大会報告

実行委員長　古川俊之

第十四回日本行動計量学会大会は八月二五日から二七日の三日間にわたり、東京大学経済学部で開催されました。

今回の大会は行動計量の目的である『人間社会の定量的な観測から行動原理を発見し、合理的な予測や分析を行うこと』を多くの関連領域の方々に知って頂きたいと考え、特別講演やシンポジウム、そして新しい試みであるナイトセッションには、会員外でユニークな研究をしておられる方々をお招きしました。特別講演は国立遺伝学研究所太田朋子博士に「分子レベルの集団遺伝学」と題して、確率論的思考実験が分子生物学にいかに生かされているかを紹介頂きました。もう一つの特別講演はマギル大学高根芳雄博士が「認知統計学の勧め」と題して、統計学と知識工学の統合による新しい進路を提言されました。シンポジウム「研究領域によって統計学はどう違うか」は統計学の適用の偏り、あるいは盲信や神話など科学と相容れない側面を掘り下げた討論を試みました。シンポジウム「空間量モデル」は計算機幾何学の発表によって生まれつつある空間量統計論の現状を取り上げました。さらにナイトセッションは今回の新企画ですが、赤門学士会分館でウィスキーの水割りを間に膝をつきあわせて本音を語る集りを開きました。「調査技術と統計論の軋轢」、「モデルの偏向と流行」とかなり刺戟的な表題でしたが、両室とも定員を上廻る計一四〇人の参加者の熱気に満ち、七時終了の予定が八時半まで延長という盛況で嬉しい見込み違いでした。どちらのセッションでもアルコールの勢いもあって、日頃あまり聞いたことのない率直な意見が出され、しかもネアカな提言に収束する討論は学会の将来に明るいものを感じさせました。

懇親会は赤門学士会分館で簡素に行いましたが、庭園のテーブルでジョッキを傾けながら、何人かの教祖的な会員を囲んでの放談会が夜が更けるまで賑やかに続きました。

実行委員会

当番校となった東京大学の全学部教官から、本学会員の方に実行委員をお願いしました。大会の準備に関する雑用の一切は実行委員長の研究室で担当することとしましたので、委員の方々には余りご迷惑をかけずに済みました。会期が残暑の最中なので、経済学部の竹内啓教授のご努力で、冷房設備のある会場を確保して頂きました。

特別の企画や演者の人選は暇のない教授では無理と判断し、実行委員から教授を除いたメンバーにプログラム委員をお願いしました。

プログラム委員長としては豊川裕之助教授（医学部）が秀抜なアイデアでナイトセッションをはじめさまざまな企画を示して下さいました。

大会参加者

正会員一九九名、準会員十三名、非会員四六名、招待者一五名、賛助会員一名、以上二七四名でした。

論文発表件数

個人発表の総数は七一件で、計十一のセッションに分かれて行われました。特別講演二件、シンポジウム十二件、ナイトセッション十一件を加えると九六件となりました。実は申込後の発表取止めを含めると総計は百件になった筈ですが、残念ながら大台は越えられませんでした。

運営についてのメモ

今回は会場に進行係や記録係は置かず、スライド係だけで運営してみました。準備やスライド送りも演者ご自身にお願いしましたが、さしたる混乱もなかったようです。海外の会議では普通のことを真似ただけですが、日本でも演者や座長がちょっとだけ雑務を負担して下さるとスムースに行くことが分った気がします。

ナイトセッションにアルコールを出したのは卓抜な効果を生みましたが、財源をひねり出すのに数社に広告を出して頂きました。何人かの方には著者紹介の記事を有料で頂きました。

参加者数の推定が甘くて論文集が品切れし、一部の方には増刷して後日郵送しました。ご迷惑をおかけしたことをお詫びします。来年度大会の成功をお祈りします。

会議記録

○理事会
時　昭和六十一年八月二十五日
所　学士会分館
出席者　理事十九名・監事二名
1. 第十四回大会での総会次第を決定した。
2. 昭和六十年度三月三十日現在の予算状況にのっとった最終決算報告と昭和六十一年度予算案が提出され承認された。
3. 各種委員会の報告があった。
4. 次期学会賞選考委員会の構成について意見を交換した。
5. 欧文誌 "Behavior metrika" の海外向け価格を、20米ドルから25米ドルへ値上げすることと決定した。

○第十四大会総会
時　昭和六十一年八月二十六日
所　東京大学経済学部
〔開会の辞〕学会事務局（岡太理事）
〔挨拶〕開催校（竹内啓経済学部教授）
〔挨拶〕学会（林知己夫理事長）
〔議長選出〕豊川裕之氏（東京大学医学部）を選出。
〔報告及び議事〕
1. 昭和六十年度事業報告、同決算報告（林理事長および担当理事より行われ原案通り承認された。）
2. 会計監査報告（宮原、開原両監事を代表し、開原監事より行われ原案通り承認された。）
3. 昭和六十一年度事業計画、同予算案（林理事長および担当理事より行われ原案通り承認された。）
〔学会賞授与〕功績賞が高根芳雄氏に、優秀賞が富山慶典氏と永岡慶三氏に授与された。
〔実行委員長挨拶〕（古川俊之実行委員長）
〔閉会の辞〕学会事務局（岡太理事）

☆昭和六十年度会計決算と昭和六十一年度予算は四～五頁に掲載。

○運営委員会
時　昭和六十一年八月二十七日
所　学士会分館（本郷）
出席者　運営委員　十二名
1. サマーセミナーについて
委員長より、今夏の実施は中止した旨報告があった。
2. 講習会について
十一月上旬に「数量化第Ⅲ類と応用分析」をテーマとする講習会を開催することを決めた。
3. 月例シンポジウムについて
今後実施するテーマについて検討した。
4. その他
会報の発行、関連学会情報の掲載などについて話合った。

会合記録

第43回月例シンポジウム
テーマ『社会調査とプライバシー』
日時　昭和六十一年九月二十六日
場所　統計数理研究所
オーガナイザー　柳原良造（マーケティング・サービス）
司会　水野欽司（統数研）
発表者　杉山明子（NHK）
　　直井　優（大阪大）
　　名和小太郎（旭リサーチセンター）
　　堀部政男（一橋大）
参加者　五十六名

会員数（61・9・26現在）
名誉会員　一名
正会員　一、〇〇三名
準会員　八七名
賛助会員　三六社

講習会のお知らせ

当学会主催の第17回講習会が左記の要領で開かれます。
会員以外の参加も可能ですので、学校や勤め先のお知り合いもお誘い合わせの上、多数のご参加をお願いします。

時　昭和六一年　十一月　十日（月）
　　十一日（火）
　　十時から十六時十分まで
所　統計数理研究所　研修室
テーマ
「数量化第Ⅲ類と応用分析」
講師　駒澤　勉（統数研）
　　中村　隆（統数研）
講習費　正会員・賛助会員所属員　五、〇〇〇円
　　準会員　二、五〇〇円
　　非会員　八、〇〇〇円
テキスト　当日、印刷物を配布
申込先　〒一〇六
東京都港区南麻布四－六－七
統計数理研究所内・日本行動計量学会「講習会」担当　中村隆
（申込は**必ず郵便で。電話不可**）
定員　三〇名程度（先着順）

▲需要の多い数量化第Ⅲ類の基礎理論と応用分析が講ぜられます。ふるってご参加ください。

昭和60年度 会計決算

昭和60年4月1日～昭和61年3月31日

収入	決算	予算	増減
前年度繰越金	1,831,015円	1,831,015円	0円
学術定期刊行物補助金	800,000	800,000	0
60年度学会費	5,969,000	5,495,000（注1）	474,000
（正会員 816名）	（4,694,500）	（4,100,000）	（594,500）
（準会員 64名）	（225,500）	（315,000）	（△ 89,500）
（賛助会員 30口）	（1,049,000）	（1,080,000）	（△ 31,000）
他年度学会費	441,500	650,000	△ 208,500
学会誌売上金	271,650	550,000	△ 278,350
大会講習会決算残高	△ 39,063	0	△ 39,063
（16回講習会）	（△ 44,144）	（0）	（△ 44,144）
（13回大会）	（5,081）	（0）	（5,081）
抄録集等収入	12,350	0	12,350
預金利子	107,347	100,000	7,347
計	9,393,799	9,426,015	△ 32,216

支出	決算	予算	増減
学会誌製作費	4,439,050円	5,478,600円	△1,039,550円
（和文誌 12巻2号）	（856,000）	（950,000）	（△ 94,000）
（〃 13巻1号）	（928,200）	（950,000）	（△ 21,800）
（〃 13巻2号）	（0（注2））	（950,000）	（△ 950,000）
（欧文誌 No. 18）	（1,042,400）	（1,314,300）	（△ 271,900）
（〃 No. 19）	（1,612,450）	（1,314,300）	（298,150）
月例会費用	159,144	120,000	39,144
各種委員会活動	223,760（注3）	300,000	△ 76,240
学会事務委託費	1,332,554	1,666,000	△ 333,446
（管理費）	（120,000）	（120,000）	（0）
（発送手数料）	（1,124,378）	（1,200,000）	（△ 75,622）
（漢字処理加算費用）	（0）	（100,000）	（△ 100,000）
（新入会員・異動処理）	（84,356）	（206,000）	（△ 121,644）
（その他）	（3,820（注4））	（40,000）	（△ 36,180）
人件費	35,500（注5）	50,000	△ 14,500
印刷費	132,182	250,000	△ 117,818
通信費	1,007,980（注6）	1,000,000	7,980
消耗品費	28,860	10,000	18,860
交通費	10,000	10,000	0
会合費	121,580	100,000	21,580
雑費	0	40,000	△ 40,000
選挙費用	0	0	
予備費	0	401,415	△ 401,415
次年度繰越金	1,903,189		1,903,189
計	9,393,799	9,426,015	△ 32,216

昭和61年度　予　　算

収　　入	61年度予算案	60年度実績	備　　考
前年度繰越金	1,903,189円	1,831,015円	（注1） 内定額
学術定期刊行物補助金(注1)	800,000	800,000	
61年度学会費	5,395,000	5,969,000	（注2） 林理事長よりの寄付金予定額 1,400,000円は入金済
正会員 5,000円×850名	4,250,000	4,694,500	
準会員 3,500円× 70名	245,000	225,500	
賛助会員30,000円× 30口	900,000	1,049,000	
他年度学会費	500,000	441,500	
学会誌売上金	300,000	271,650	
預金利子	120,000	107,347	
学会賞基金（注2）	2,000,000		
計	11,018,189		

支　　出	61年度予算案	60年度実績	備　　考
学会誌製作費	5,478,600円	4,439,050円	（注3） 60年度未発行分
和文誌 13巻2号	950,000(注3)	和文誌12巻2号 856,000	
〃 14巻1号	950,000	13巻3号 928,200	（注4） 編集委員会，刊行物委員会，選考委員会，社会調査技法研究会
〃 14巻2号	950,000	欧文誌No.18 1,042,400	
欧文誌 No. 20	1,314,300	No.19	（注5）(財) 日本学会事務センターへの委託費
〃 No. 21	1,314,300	1,612,450	
月例会費用	120,000	159,144	
各種委員会活動（注4）	300,000	223,760	（注6） 1,200名年8回発送
学会事務委託費（注5）	1,566,000	1,332,554	
管理費	120,000	120,000	（注7） 新入会員70名 異動 250名
発送手数料	1,200,000(注6)	1,124,378	
新入会員・異動処理	206,000(注7)	84,356	（注8） 事務連絡費，コピー代，リスト打出し料等
その他	40,000(注8)	3,820	
人件費	50,000	35,500	（注9） 学会事務センターにおける郵税を含む
印刷費	250,000	132,182	
通信費（注9）	1,000,000	1,007,980	
消耗品費	28,800	10,000	
交通費	10,000	10,000	
会合費	100,000	121,580	
雑費	40,000	0	
予備費	74,789	0	
学会賞賞金	200,000		
学会賞基金繰越金	1,800,000		
計	11,018,189		

海外研究事情――イギリス

よき伝統について

岩坪秀一

昨年十月から本年七月まで、英国ロザムステッド研究所統計部に所属して、J・C・ガウアー部長のもとで多変量統計解析関係の研究を行ってきた。主座標分析法の考案者として、ガウアー部長の名を知っている方もおられよう。

この研究所は、日本ではロザムステッド農事試験場の名で知られている通り、国立の農事総合研究所で、ヨーロッパをはじめ世界各地からも研究者が派遣されて研究にいそしんでいる。

統計部は、農業研究の過程で出てくる統計的諸問題の解決を目的に設置され、R・A・フィッシャーが初代の部長であった。実験計画法、推測統計学などが生み出された近代統計学発祥の地でもある。現在、研究員は約三十名で、他の農業研究部門の統計的データ解析に協力しており、現実のデータに密着した、地に足のついた統計研究が行われていた。ほぼ毎週一回行われていた研究会の討論でも、「自分の分析経験によると、こういうことがあった」というふうに実証的な結果に基いた発言がなされるため説得力を持っていた。

多変量解析的手法は、統計部で開発した統計ソフトウェア「GENSTAT」にほとんどのものが登録されており、データ解析の道具として偉力を発揮していた。フランスで盛んな数量化Ⅲ類に似たコレスポンデンス・アナリシスも納められていて、実際にも利用されていた。

英国統計学会の研究発表会が、毎月一回、水曜の夕方にロンドンで開かれていたので、つとめて出席した。これは、統計学会誌に載ることになった論文の発表とそれに対する討論を行う場で、大変興味深いものが多かった。その一つを簡単に紹介しよう。

英国では、一九八三年一月から運転席と助手席でのシートベルト着用が義務づけられた。その前後で自動車事故による死傷者数がどのように変化したか、毎月のデータを構造時系列モデルと呼ばれるもので解析した結果の報告があった。結論は、運転者及び助手席の人間の死傷者数が有意に減ったものの、後部座席の人、歩行者、自転車利用者については、有意な減少はない、むしろ自転車利用者の死傷者は増加の傾向がみえるというものであった。解析モデル構築の話も興味深かったが、なによりも発表後の討論の活発さに驚いた。最初は、統計学者によるモデルに対する理論的コメントが続いたが、そのあと、交通関係者、医者、運輸省の役人等が次々と立って、総計十五人もの人間が意見を述べたのは壮観であった。終了予定時刻を大幅に超過したものの、参加者は、久々の知的興奮に満足して、三月とはいえ寒さ厳しいロンドンの夜の巷にはき出されていった。

英国分類学会の年会にも出席したが、そこでは「形の分類」というテーマで、いくつかの面白い発表があった。大英博物館考古部所属の研究者は、石器や壺を分類するための特徴抽出の話をした。ロンドン大学の若い先生は、見事な対称立体図形をカラーディスプレイ上に表示しながら、表示アルゴリズムを熱っぽく語った。会場はリンネ協会講堂で、ダーウィンの肖像画が懸っていたのが強く印象に残っている。

英国の統計研究者の話を聞いていると、理論に関したことも現実のデータに立脚して話すのが常であった。経験主義哲学を生み出した英国人の伝統的な態度なのであろう。

英国は、伝統を重んじる国であるといわれる。よき伝統とは、常に何か新しいものを産出し続けていく力を持っているように思われる。わが行動計量学会の伝統の一つは、データ解析法のメーカーである会員と現実のデータ解析にたずさわっている、方法のユーザーである会員との、絶え間ない、対等の交流であると思う。この交流があってこそ、現実のデータ解析に有用な手法が生まれ、かつ新たな知見が見出されていくのだと思う。新しいものを生み出していく我々のこのよき伝統がいつまでも続くことを心から祈りたい。

（いわつぼ・しゅういち　日本行動計量学会理事　大学入試センター）

〔学会賞受賞会員の声・I〕

受賞によせて

功績賞・高根　芳雄

まことに光栄です。実は最初に賞の知らせを受けたときふと頭に浮んだことがあります。だいぶ昔のことですが、心理学の学生だった頃、頭の良いネズミを交配させてもっと頭の良いネズミを作るという話を聞きました。その試みは一見成功したかのように見えたのですが、後になって頭が良いと思われたネズミは単に活動性が高いだけだったということがわかりました。活動性が高く迷路の中をウロチョロするとそれだけエサにありつく確率も高くなるという訳です。研究者としての自分もそんなところ（活動性の高いネズミ）ではなかったかと思っています。

私はもう十年余りも北米に住み外から日本を眺めている訳ですが、その間の日本経済の躍進には目を見張るものがあります。日本の企業は実に良くやっていると思います。円は上がる一方だし、最近では世界一の債権国になったというニュースを聞きました。私の願いは、今後日本が経済面に限らず、学問や研究の分野でも是非世界一の債権国になって欲しいということです。自らも及ばずながらそれに向けて、今後とも一層努力を重ねて行きたいと思います。

私にはいま大きな研究テーマが二つあります。一つはプロセス・モデルを作ることです。これは私の専門とする心理計量学の場合でいえば、データの発生機構、それに潜在する心理過程を組み込んだ形でモデルを作ろうということです。もう一つは今度の特別講演でもお話した認知統計学です。データ解析の本来の目的はデータから意味のある情報を取り出してくるということですから、パターン認識、問題解決の方略といった人間の情報処理活動に必然的に関わってくると考えられます。従って、従来の数理モデルに加え、データ解析の実践における認知的側面にもう少し焦点を当てていく必要があるのではないかと思われます。このことはデータ解析を実行する人間の認知活動を対象化するという意味で、行動計量学の一大テーマになるような気がします。

（カナダ・マッギル大学）

▲昭和60年度会計決算への注記（決算表は四ページを参照）

注1　正会員五千円×八二〇名
　　準会員三千五百円×九十名
　　賛助会員三万円×三十六口

注2　未発行

注3　欧文誌幹事会 111,600円
　　和文誌幹事会 80,000円
　　運営委員会 32,160円

注4　事務連絡費、コピー代等

注5　第13回大会受付

注6　学会事務センター発送分 945,320円
　　事務局通信費 62,660円

会員の声の募集

☆「会報」を会員相互の率直な意思交流の場とするため、各方面の会員からの御投稿をお待ちします。

☆とりわけ「会員の声」欄では、準会員や若手正会員の皆さんから学際学会としての日本行動計量学会への入会動機や期待といった内容の御投稿を期待します。

☆分量は、たて書き15字づめで、60行から90行程度。題目、所属などを付記してください。

☆送付先

〒115 東京都北区西が丘3－9－14
国立国語研究所内　杉戸清樹

学会誌バックナンバー購入のご案内

ご希望の巻・号名、冊数、および送金先・氏名を明記し、代金と送料を左記あてに郵便振替でお送り下さい。

◇請求先　〒一七一
東京都豊島区西池袋三丁目
立教大学社会学部岡太研究室内
行動計量学会事務局　岡太彬訓

◇振替
番　号　東京八－一四八〇五六
加入者　日本行動計量学会

◇和文誌『行動計量学』
1巻1号　（八百円）
2巻1・2号　（各七百円）
3巻1・2号　（各千円）
4巻1号　（千五百円）
4巻2号、5巻1・2号　（各千七百円）
6巻1号　（千二百円）
6巻2号　（二千円）
7巻～13巻の1・2号　（各二千円）

◇欧文誌 "Behaviormetrika"
No.1～19　（各二千円）

◇送料
一冊　二百四十円
三冊まで　三百五十円

〔学会賞受賞会員の声・Ⅱ〕

個人的合理性と社会的合理性

優秀賞・富山　慶典

ここ十数年間、個人的あるいは社会的決定理論を学び研究しながら、個人と社会の問題を考えてきました。個人の合理性（individual rationality）とは何か、社会の合理性（social rationality）とは何か、二つの合理性はどのような関係にある（べきな）のか。例えば、本質的に対立してしまうものなのか、あるいは共存しえるものなのか。これらは、経済学や社会学・政治学・心理学の分野で幾度も問い直されてきた最も基本的かつ重要な問題のひとつであるように思います。

『「譲り合い」による社会的決定に関する実験的研究』（行動計量学5巻1号）や『「ただ乗り問題」における行動選択－公共性意識の要因をさぐる－』（同9巻1号）では、人々の行動の中に潜む合理性を導出するという目的のもとに、これらの問題に実験的にアプローチしました。一方、『Evaluation and Modification of Voting Consequences by Mean-Variance Analysis of Voters' Satisfaction』(Behaviormetrika, No12)や他3編では、導出された合理性を正しく反映できる社会的決定方式を構築するという目的のもとにこれらの問題に理論的にアプローチしました。

これらの研究成果はまだまだ小さく未熟なものです。当面は、人々の意思決定行動を通して、これらの問題をさらに実験的に吟味しその成果を理論化していく必要があります。将来は、意思決定行動に関する成果を踏まえ、人間行動に関するより広い観点からこれらの問題を考えていかなければならないと思います。

当学会に所属して十年の間、学会発表では会員の皆様に、論文発表では歴代の編集委員長ならびに委員、査読者の先生方にお世話になり育てていただきました。また佐伯胖先生からは教育・研究活動の実践を通じて公私にわたるご教示を賜わりました。なお一層の修練を重ね、ねばり強く勤勉に努力しつづけることを心に誓い、皆様への感謝の言葉とさせていただきます。ありがとうございました。

（筑波大学）

いつまでも初心者を受け入れる学会であってほしい

優秀賞・永岡　慶三

此度は、はからずも学会賞受賞の栄誉にあずかり、光栄に存じますと同時に、学会員の方々に感謝申し上げます。

感謝の意味は、この学会が私を育ててくれたことに対してです。

現在、私は教育工学センターというところへ所属しており、教育工学を研究の専門としています。教育工学は学際・複合領域の典型的な分野で、一昨年ようやく学会が発足しましたが、それまでは本学会をはじめ関連の各学会の教育（工学）のセッションが研究発表の場でした。

行動計量学会には、発足のころから参加していましたが、特に本学会が他の学会と違う印象を受けたのは、他学会で時に見られる、実際の研究をしている者と学会運営にあたる理事とひな段に上がる名誉職とが、各々全く異るという形骸化がなかったことです。

大会も14回を数えるくらいになると、ほとんどの研究者は常連、顔なじみで、会場でも互いに談笑している雰囲気はそれ自体はよいことなのですが、分野が違ったり若かったりで自信のない参加者は、妙に近寄りにくい感じを受けることがあります。その点について、いつまでも初心者を受け入れる学会であってほしいと思います。

ちなみに、今回の私の受賞の対象としていただいた討論過程の研究は、九年前の大会で、私の発表に対し論文投稿するよう声をかけて下さったI氏（現理事）の一言がきっかけとなったものです。

最後に、研究に関してですが、教育工学の一つの柱として、「計量教育学」というものが確立されないものかと、いつも思っています（10年前から思っていてまだまだ）。同じ非理工系学問分野でも計量心理、計量経済が十分に認知されているのにです。本学会でも教育のセッションがもっと活発になるよう祈っています。

（神戸大学教育工学センター）

☆会報係から

学会賞の制度が動き出し、はじめての授賞者が出ました。早速お願いしましたところ、お三方ともすぐに御寄稿下さいました。会報の恒例記事にしたく思います。